

AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

子どもの虐待とネグレクト (2007.08) 9巻2号:195～201.

文化の中の子ども虐待 文化と虐待

松岡悦子



文化と虐待

松岡悦子¹⁾

以前、10代の男の子が首に金属の鍵をはめられた状態で逃げ出してきて、警察に助けを求めた事件があったと記憶している。親に抵抗できずに、首に輪をはめられた不自由な状態でいたと思うと、その子の無力さが不憫に思われた。首に輪をはめられた状態と言えば、「首長族」と言われて、首にいくつもの輪をはめたカレン族の母娘がテレビに登場していたのを記憶しておられる方もいるだろう。輪投げの輪のようなものをいくつも首にはめているので、首が長く見えるのだ。これはカレンの人たちの装飾や装いで、民族衣装と同様に、彼らの美意識の1つの表現だと私は思っていた。私がやっている文化人類学という分野では、地球上のさまざまな民族の生活習慣やものの考え方を現地に行って調べ、それを書き記すのだが、そういう文献によると、この地球上には実に多様な習慣を持つ人たちが生活している。民族衣装が多彩なだけでなく、体そのものに印を彫り込んだり、体を変形させたり、体の一部を切り取るなど、人類は自分たちを他の集団から区別するためにさまざまな身体変工を行ってきた。それには当然痛みが伴うはずだが、人々は苦痛を我慢することで無事に大人になるとか、より美しくなると信じてそういう習慣を実践していた。産業化する以前の社会では、こんなふうに身体を加工することは、痛

図1 カレン民族^{注1)}

みを我慢することも含めて、通過儀礼の重要な要素になっている。いや、現代社会でも人々はタトゥーやピアスや髪型で体を加工している。ただそのもつ意味が、社会によって違うのだ。

カレン民族の首輪が虐待になる

カレンの首に輪をはめる習慣もそういうものの1つだと思っていたところ、ある時アメリカの新聞で、このカレン民族の習慣が虐待として取りあげられているのを知ってびっくりした。その記事によると、この輪をはめる習慣はカレンの人々の間ではすでに廃れてしまっているのに、今再び観

Culture and abuse

1) 旭川医科大学, Etsuko Matsuoka: Asahikawa Medical College



光客を引きつけるために子どもたちに輪がはめられているという。ところが小さい時から首に輪をはめていると、首を支える筋肉が弱ってしまい、輪をはずすと首が折れ曲がってしまうらしい。死ぬまで輪をはずさない時代には問題なかったのだろうが、途中で輪をはずすことになれば、これは一大事だ。その記事は、これは国家ぐるみの児童虐待だと述べていた。そう思ってみると、カレン民族の輪は、先に述べた男の子の首にはめられていた鍵と同じようなものに思えてくる。みな文化として行っていた時には決して虐待とは見なされなかったことが、それが文化ではなくなった時に、虐待と見なされるようになる。虐待は、首に輪をはめるという行為自体よりも、それがどんな状況の中で行われているかによって、虐待になったりならなかったりするわけだ。

耳のピアスや入れ墨

文化によって、同じ行為が違った意味を持つ例はたくさんある。たとえば耳にピアスの穴を開けるのは、ジャワ島では女の子の印で、親が自分の子どもとして認知したことを表している。穴を開けていないと、誰の子でもないという意味で大切に扱われていないことになるという。でも日本の中学・高校では、ピアスを開けているとだらしないとか反抗的と見なされる。耳の穴の持つ意味が文化によって大きく違うわけだ。またアイヌの少女は、思春期になると口の周りに入れ墨を入れた。入れ墨をすることでより美しく、一人前になるとされていたので、小さい子たちのあこがれだったようだ。とは言っても、入れ墨を入れること自体は苦痛で、口の周りが腫れ、しばらくはものを食べるができなかったという。それでも我慢して入れ墨を入れて、大人の仲間入りを果たしたわ

けだ。このように痛みをとめない、体を傷つける行為は、今の基準からいけば虐待と言えなくもない。特に、本人の同意を得ずに、一律に文化として行うわけだから、自分はやりたくないというわけにはいかない。その文化に生きる人たちはみな同じように、そうしなければならなかった。そう考えると、文化とは個人を抑圧する側面を持っていて、自分だけ違うことをする自由はないことになる。

早婚、児童労働

文化が個人を抑圧しているのではないかという例はたくさんあるが、早婚の習慣もそうだ。バングラデシュの農村に行くと、14歳で子どもを抱っこし、夫がどこかに行ってしまったと悲しんでいる少女に会った。もっと年配の女性たちに話を聞くと、9歳や10歳で結婚し、夫や家族の身の回りの世話をしているうちに妊娠して出産し、母になったという。誰もがそうやって母になっていく時代には、そういうものだったかもしれないが、その女性たちには好き嫌いを言う自由も、他の選択肢もなかったのである。先進国の基準で考えれば、本人の同意なく、好きでもない男性と性関係をもたされるのだとすれば、それはレイプや強制わいせつに相当することになる。もし現代日本で、10歳の子が結婚させられようとしていたら犯罪になるだろうし、倫理的にも大きな問題とされるだろう。でも、早婚が多くの人に共有された習慣ならば、文化ということになる。

また、中国では今北京オリンピックに向けて工場オリンピックグッズを大量生産しているが、そこで子どもたちが働いていることが、欧米のメディアで問題視されている。子どもたちが働くことは、学校教育が義務になる以前の社会ならどこ



でも望ましいことだったし、子どもは10歳になれば立派にお金を稼いできてくれた。バングラデシュの農村では、息子が12歳になったら夫よりずっとあてになる収入源だし、中国の農村でも子どもが働くことはよいことで、決して悪いこととは見なされていないからだろう。でも、社会が近代化すると、子どもが学校に行かずに市場労働をすることは搾取や虐待と見なされるようになる。小さいうちから働くことが当たり前前の社会では、子どもの労働は望ましいことだが、そうではなくなった時に、子どもの労働は違った意味を持つようになる。

こんなふうに、文化人類学が文化の多様性と見なしてきたさまざまな習慣が、人権や平等、民主主義などの観点からすると虐待になるという例が出てくる。でもだからと言って、虐待は文化人類学では文化として許容されているのだと言いたいわけではない。虐待は、あくまでその社会や文化の中で決まることだから、別の文化を持ってきてそこでは虐待でないとと言っても意味がない。ただ、虐待が社会的に構築されたもので、何を虐待と見なすかは文化によって違いがあるとは言えるだろう。同じように産業化された社会でも、日本では虐待と見なされないことが、アメリカやイギリスでは虐待と見なされることがある。さらに、私たちの社会ではあまりに当たり前となっていて、その暴力性に気づかないことが、他の文化と比較すると暴力として見えてくる例があるかもしれない。

スウォドリリング^{注2)}

育児の習慣の中に、スウォドリリングといって赤ん坊の手足を伸ばして体にぴったりつけ、布でぐるぐる巻きにする習慣がある。インドネシアの農



図2 ジャワ島で、生まれてすぐにスウォドリリングされた赤ん坊

村部や南米の一部では、今も赤ん坊がかなりきつくぐるぐる巻きにされているし、モンゴルや東欧でも行われている。この育児習慣は、ギリシャやローマ時代から18～19世紀までずっとヨーロッパ、ソ連、アメリカでも行われ、それに対してフランスの思想家のルソーやアメリカのデューイが、よくない習慣だといって批判した。しかし、ふにゃふにゃの赤ん坊を布で巻いて抱きやすくするのはきわめて合理的とも言え、アメリカ先住民のホピやナバホは、スウォドリリングした赤ん坊を板や棒にくくり付けて運んでいた。これに興味をもった人類学者が、先住民のホピの赤ん坊の様子を観察し、スウォドリリングによって赤ん坊の手足の発達が遅れないのかどうかを調べた。それによると、どの年齢層でもホピの子どもたちの発達は、白人の子たちと変わらず、また同じホピの中でもスウォドリリングされた赤ん坊とされなかった赤ん坊を比べたところ、歩き始めの時期には差がなかったようだ。人類学者は、この習慣に対してよいとも悪いとも言わず、寛容な態度を示していた。

それに対して、医師はとても批判的だった。たとえば、18世紀のある医師は次のように言っている。「きつくスウォドリリングされていると、赤ん坊の内臓は締め付けられ、手足は自由を奪われ



てしまう。動かさないと手足は鍛えられず、きつく巻かれることで赤ん坊の柔らかい体に耐えきれないほどの強い力がかかることになる。圧迫によって血の巡りが悪くなると、別のところに不自然な腫れができる。特に赤ん坊の線維細胞は膨張しやすい。大人になってから、体が奇形になったり変形している人を見かけるが、これはスウォドリングの習慣のせいだと思う。特に、女性はこの影響を大きく受けている」

またフランスでは、18世紀のパリの子どもの多くが親元で育てられずに、近郊の農家に里子に出されたり、乳母に育てられていたようだが、それに対して思想家のルソーは、次のように言っている。「実の母親たちは、自分たちの子どもたちが農家でスウォドリングされ、粗雑に育てられていることを、かわいそうに思わないのだろうか。スウォドリングは育児をする人が手抜きをして育てるのに都合のいいやり方だ」

さらに、19世紀になるとアメリカ人のデューイは、スウォドリングを残酷な習慣だと述べて、無知な助産師がそれを勧めているとしている。そして、次のように述べる。「赤ん坊は、かわいそうなことに9カ月間も母親の狭い子宮の中に閉じ込められている。そしてそこから出たとたん、小さな手足を四方八方に伸ばして喜びを表現する。赤ん坊にとって、自由に動けることがいかにうれしいことか、わかろうというものだ」。デューイのコメントは、まるで女性が赤ん坊を子宮の中に9カ月間も入れているのは、残酷だとでも言わんばかりの口ぶりだが、自由に動けることが重要だと述べて、スウォドリングがその自由を奪っている点を批判している。

アメリカ人のスウォドリングへの関心

アメリカでは、1950～60年代に、スウォドリングに対する関心が高まり、メディアでも取り上げられ、有名な人類学者たちがその議論に加わった。ちょうど、排泄や睡眠のしつけなどの育児習慣とその国の大人のパーソナリティとの関係が人類学の研究テーマになった時代。特に、ソ連の国民性を研究したいと思うアメリカ人にとって、ロシア人がやっているスウォドリングは格好の話題だった。そこで、人類学者や医師、心理学者が議論に加わり、アメリカに住むロシア生まれの人たちにスウォドリングの体験について質問を行った。彼らのうちの何人かは母国のスウォドリングのことを「まるで拷問だ」と語り、自身がスウォドリングをされていたかと聞かれると、「父は愛情をかけて私を育てたので、私はスウォドリングされなかったと思います」と述べている。スウォドリングは親の愛情のなさとも結びつけられていたわけだ。

アメリカ人がスウォドリングの議論にこれだけ惹きつけられたのは、スウォドリングが赤ん坊の自由を拘束するという点にあったと思う。アメリカ人がとても大切にしている自由をスウォドリングされた赤ちゃんは妨げられているという点が、ロシア人の性格を理解するのにぴったりだったのだろう。スウォドリングは自由を奪われた人々の象徴でもあったのだ。しかも、ソ連との東西対立のまっただ中という政治的状況がある。あたかもスウォドリングによってロシア人の性格が作られているかのように、ロシア人やソ連への論評がなされた。たとえば、スウォドリングは、ロシア人が変な感情を持たないようにするために、赤ん坊の時から感情を抑圧する手段として行われているとか、ロシア人もアメリカ人と同じように本当は自由を愛する人々なのに、独裁的な政府が彼らを抑圧しているのだから、人々には責任はないと



というような説が作られた。アメリカ人は、スウォドリングを自由を妨げる習慣として取り出したかったのだろう。その背景には、アメリカ人の自由への強い思い入れや、東西冷戦という背景があったわけだ。

ジャワとモンゴルでは

では、現在もスウォドリングをしている人たちは、なんと言おうのだろうか。私が文化人類学的なフィールド調査で出会った人たちの声を聞いてみよう。インドネシアのジャワ島の農村では、生まれてすぐから3カ月ぐらいまで赤ん坊は昼も夜もスウォドリングされている。年配の人たちになぜスウォドリングするのかと聞くと、決まって「そうしないと赤ん坊の手足が曲がったままになってしまう」と答える。赤ん坊の足は、確かに生まれたばかりはがに股で、腕は万歳の形をしている。だからそれを矯正しないと、人間らしい形にならないというのだ。そうかと思うと、「スウォドリングしないと、赤ん坊はしょっちゅう手足を動かして疲れてしまい、機嫌が悪くなってよく泣くようになるからだ」とも言う。でも少し若い人たちは、「スウォドリングすると赤ん坊がよく眠ってくれるので、その間に家事ができて楽だから」と答える。では、逆に3カ月ぐらいになったら赤ん坊にスウォドリングをしなくなるのはどうしてなのかと聞くと、「赤ん坊がいやがって泣くからだ」と答える。ジャワでは、赤ん坊はスウォドリングの合間に、1日に何回か沐浴とマッサージをされていて、スウォドリングが赤ん坊の発達を阻害するという見方はまったくなされていない。

モンゴルでもやはりスウォドリングが行われている。その理由を聞くと、スウォドリングをすると赤ん坊の体が丈夫になるという。なぜなら、赤

ん坊は布で包まれて身動きできないから、何とかそれをはねのけようとして力を入れ、それで筋肉が鍛えられるからだという。また、背中がまっすぐに伸びた姿勢のよい人になるために必要なのだという。昔は背中のところの木を入れてまっすぐにしようとしたけれど、今はスウォドリングをする期間も短くなったし、まったくしない人もいる。スウォドリングをしないのはよくないね、と年配の女性は言っていた。

スウォドリングを虐待と見る視線と、子どもを丈夫で姿勢のよい子にするのに必要なことと見る見方は全然違うもので、どちらが正しいとは言えない。スウォドリングをとらえるまなざしの違いが、虐待に見えるか子どもに必要な習慣に見えるかの違いを産んでいる。虐待と見るまなざしの背後には、医学的な体の理解、自由を重視する価値観、対立国の育児習慣といったことがある。子育てに必要なものと見なすまなざしの背後には、生まれたての子どもは自然のままの存在なので、文化的に手を加えてその文化にふさわしい体つきにしなければならないという考え方がある。また、よく眠り手がかからない子育てを望ましいとする育児者中心の見方もある。

女性性器切除 (FGM)

さらにもう1つ、文化人類学にとっての難問となっているものに女性性器切除がある。これは、アフリカや中東の一部で、思春期になる前の少女に地域の伝統的な施術者が行うもので、クリトリスの一部を切り取るだけのものから、小陰唇、大陰唇まで切り取ってしまうもの、さらには膣を縫い合わせ、あとから細い木を差し込んで尿と生理の血液が出る穴を作るものまでバリエーションがある。これが共有された習慣となっている地域で

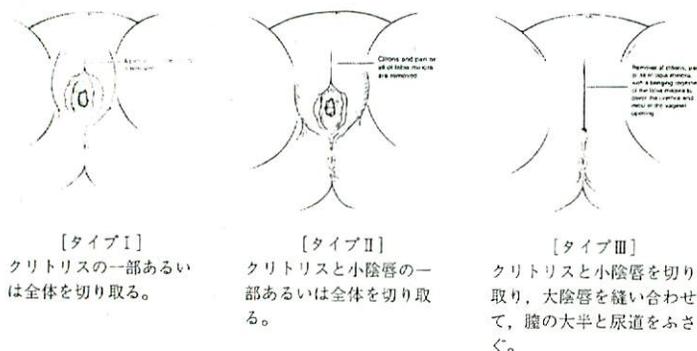


図3 FGMの3タイプ^{注3)}

は、この切除を受けていない女性は結婚相手と見なされないため、母や祖母は少女にこの手術を受けさせることになる。でも麻酔なしで行われる施術は当然ながら痛く、感染や出血の危険もある。なぜこんな習慣があるのかについては、女性が結婚前まで貞淑であるためとか、女性はFGMを受けないと美しい性器になれないとか、女性の性欲を抑えて性の乱れを防ぐためなど、現地ではさまざまに説明されている。いずれにしてもその文化の人にとっては意味のある行為で、昔からずっと受け継がれてきた伝統ということになる。

それに対して、こんな習慣を持たない国の女性たちからは、これは女性の性器への暴力で児童虐待だという反対が起こり、広汎な廃絶キャンペーンが繰り広げられるようになっていく。女性の体を男性の利益に合わせて切り取ったり縫い合わせたり、また社会の秩序を守るために加工するなど、とんでもない差別的な行為だということになる。しかもまだ意味のよくわからない子どもをだまして施術するなど、残酷で女性の人権を無視していることになる。施術による出血や感染で命を落とす子もいるし、将来の出産時には膣が十分に伸展しないために難産になるリスクが高まるとされている。

る。だとするならば、医学的にも決して望ましいとは言えない。こんなふうには、人権、平等、健康というより普遍的な概念から見た時に、女性性器切除は廃止すべき、あるいはやめさせるべき困習ということになる。

FGMの医療化

そこで最近の傾向として、FGMを病院で医師や助産師にしてもらうということが起こっている。麻酔や消毒をして医療行為として行うならば、伝統を損なうことなくしかも安全に配慮してできるというわけだ。FGMの医療化である。これを進歩や改善と見るか、それともかえってFGMの本質を見えにくくすると見るかは、議論の分かれるところだろう。FGMの持つ差別性や女性の人権無視、健康や出産への悪影響は、仮にそれが病院で行われても何ら変わることはない。しかし、暴力性についてはどうだろうか。無知な伝統的施術者が、麻酔もせず、カミソリの消毒もせずに、何人もの少女の性器を切り、その後の手当も灰や現地の薬草を傷口に塗るだけと聞くと、残酷で暴力的に思える。でも、清潔なベッドの上で麻酔をして医師が性器の一部を切り取るとなると、同じことをしても暴力性は感じられなくなる。あることが医療行為として行われると、その暴力性が見えなくなるというのは医療の大きな特徴かもしれない。FGMが、アフリカの不衛生で無知な女性という文脈から、麻酔や消毒のある病院と専門家という文脈に移ったとたんに暴力性がぐっと薄まるとすれば、逆に近代化した社会の中で、医療の名のもとに行われているがために、暴力性が見えなくなっているも



のがあるかもしれない。

先進国のFGM

FGMに反対する西欧の女性たちは、アフリカの女性たち自身がFGMの差別性と暴力性に気づいて、自分たちの娘には受けさせないようにしてほしいと考えている。そのためには、アフリカの女性たちがもっと人権意識や男女平等の意識を持ってほしいと考えている。でも、誰しも他人の文化は見えるけれども、自分の文化には気づかないものだ。アフリカのFGMの暴力性は、アフリカ以外の人にはよく見えるけれども、アフリカの人たちには見えにくい。同じように、日本の私たちの文化に潜む暴力性は、この文化でずっと育った私たちには見えなくなっている。

アフリカの人たちは、FGMを批判するならば、あなたたちが病院出産で受けている会陰切開はどのようなかと逆に問いかけてくる。ほとんどの病院出産では、赤ん坊が出てくる時に臍から肛門の方に向けて切開を入れ、赤ん坊の出口を広げるからだ。その後縫って元通りにするけれども、女性たちは産後しばらく座ることもままならず、とても痛い。切らなくてももちろん赤ん坊は出てくるけ

れども、切った方が早く出るとか、切ってから縫った方がきれいに縫える、また切った方がその後子宮脱になりにくいなどと病院で説明されて、切られることが多い。これは医療の中で行われるので、私たちは暴力的な行為だとか女性に対する虐待だとは言わずに正統な医療行為だと思っている。しかし、医療が暴力性を見えにくくしてしまうことを考えると、会陰切開は先進国のFGMという見方もできる。先進国を支える巨大な文化としての医療は、暴力を呑みこんでしまうのかもしれない。

こんなふうに文化は虐待を見えなくしたり、逆に文化が虐待を照らしだしたりする。虐待をとらえるまなざしの背後に、私たちの文化が横たわっている。

注1) http://www.chiangmai-chiangrai.com/long-neck_karen.html より

注2) スウォードリングについては、以下の文献を参考にしている。Lipton E, Steinschneider A, Richmond J: Swaddling, a child care practice: Historical, cultural, and experimental observations. *Pediatrics*, 35 (Suppl); 521-567, 1965.

注3) Female Genital Mutilation Committee on Bioethics (*Pediatrics*, 102 (1); 153-156, 1998)